

新たにノイズキャンセリングを搭載

Compact コンパクトに

カラダが自然と動き出すような「タイトな重低音」と「伸びのある中高域」。
オーディオテクニカならではの重低音を表現した「SOLID BASS」シリーズに、
コンパクトなボディに、ノイズキャンセリングや充実のアプリまで備えた、新作イヤホンが登場した。

文／海上 忍 Shinobu Unakami



定番アイテムに、デザインと機能を「プラス」!

ラテン語に由来する「Plus」は欧州諸語共通の言葉で、～より多くの、～よりさらに、という意味合いを持つ。英語経由で伝わった本邦でも意味は同じ、現状あるものに何かが付加されることを指す。

オーディオテクニカから発売された「ATH-CKS30TW+」は、文字どおり ATH-CKS30TW に何かがプラスされた製品だ。プラス要素は大きく2つ、「スケルトン」を含む新しいカラー、そしていまや完全ワイヤレスの必須機能「ノイズキャンセリング」。基本設計は ATH-CKS30TW を踏襲するが、この2つが製品に新たな魅力を与えている。

新顔のスケルトンは、SOLID BASS らしさを追求した結果だ。イヤホン内部が透けて見える構造を採用しようと方向性が定まったあと、商品企画チーム内では色調をどうするかで喧々諤々、幾度もの試作を経てブラック×イエローゴールドに落ち着いたという。「重低音という SOLID BASS シリーズの“らしさ”を感じさせるテイストを選出した」(商品企画担当・永山氏) そうだが、確かにスケルトンとはいっても透けすぎずメカニカル過ぎず、遊び心を感じさせる仕上がりがだ。

同じ黒基調のマットブラックと見比べてみたが、ブラック×イエローゴールドのスケルトンは佇まいがまるで違う。敢えて表現するなら、

マットブラックは「端正」で「質実剛健」、スケルトンは「爽涼」で「外柔内剛」というところ。最終的には好みの問題だが、内部の基板や配線が透けて見えるボディは、意外なほど落ち着きがあり魅力的だ。

もうひとつのプラスは、ノイズキャンセリング。担当者に話を訊くと、「実は前モデルの開発中から検討していた」(技術担当・植堅氏) という。ATH-CKS30TW+ で満を持して投入する形だ。

SoC 内蔵の DSP を駆使したフィルタプログラムによりアクティブノイズキャンセリングを実現。方式はイヤホン外側に配置したマイクを使うシンプルなフィードフォワード式だが、やはりオーディオテクニカらしい堅実さが光る。そのひとつがパッシブノイズキャンセリング性能だ。「使用しているマイクや位置は前モデルと同じだが密閉性を見直している」(技術担当・田久保氏) そうで、ノイズキャンセリング対応を実現するにあたり、いわば足腰の部分を改良している。しかも「マイクは可聴域の高い周波数においての聴こえ方が特に自然なものを採用しており、シーリング構造と防水フィルターを経て全方向からの環境音を均一に收音するように配置している」(植堅氏) というから、ノイズキャンセリング対応は前モデルの開発時から慎重に進

重低音を纏う

ノイズキャンセリング完全ワイヤレスイヤホン

Audio-Technica ATH-CKS30TW+

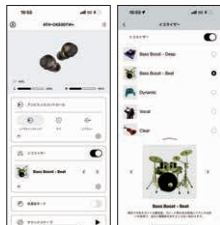
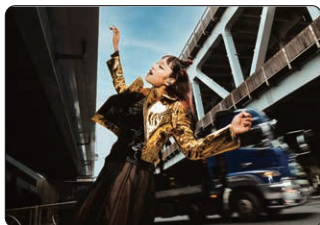
¥OPEN ▶投票 No.001

- SPEC ●通信方式: Bluetooth Ver.5.1 ●対応コーデック: SBC、AAC
●ドライバー口径: 9mm ●連続再生時間: 約6.5時間(ケース込み約17.5時間) NC ON
●質量: 約4.5g(イヤホン片側) ※スケルトンは約4.6g、約28g(充電ケース)
●付属品: イヤーチップ(XS/S/M/L)、充電ケーブル
●カラー: マットブラック、エバークリーン、ライトベージュ、スケルトン

音楽好きにこそお薦めしたい

「ノイキャン」と「重低音」

音質に影響が少ない、フィードフォワード方式のノイズキャンセリング機能を新たに搭載。9mmダイナミック型ドライバーは従来モデル「ATH-CKS30TW」を引き継ぐ。静けさのなかに「キレのある重低音」が際立つ、音質重視の完全ワイヤレスイヤホンだ。アプリにはイコライザーが用意されていて、低音重視のサウンドモードについても「Beat」と「Deep」の2種類から好みで選べる。



められていたことなのだとわかる。

そのほかの便利機能としては、IP55 防塵防水と低遅延モード、マルチポイント接続、イヤホン紛失を防止する「置き忘れアラート」があるが、ここの細やかな心遣いがある。いずれもソフトウェアレベルでの対応だが、アプリによる設定が必要になるため、「イヤホンをスマートフォンと接続すると(OSごとの違いはあるものの)アプリとも自動接続されるよう機能をアップデートしている」(技術担当・松本氏)というのだ。確かに、イヤホンを使う都度アプリを起動するのは煩わしい。実用的な設計だ。

肝心のサウンドだが、ドライバーやチャンバーなど主要部にはハードウェア的な変更がほぼないだけに、基本的には前モデルと同じ傾向だが、ノイズキャンセリングを有効にして音圧を下げ気味で聴くことが増えるため、φ9mmダイナミックドライバーとアコースティック設計の素性がわかりやすくなる。技術担当・田久保氏が「ただ単純に低音を出すのではなく、SOLID BASS シリーズ共通の“タイトな重低音”と“伸びのある中高域”を目指している」と語ったとおり、本来の設計意図がよりわかりやすくなった印象だ。



片側わずか約4.5g

カラーと塗装を更新

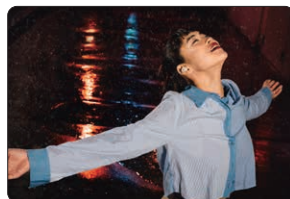
イヤホンも充電ケースもコンパクト。イヤホンは片側わずか約4.5g。従来モデルからカラーが変更されていて、中身が透けて見える「スケルトン」を含む全4色展開に。塗装は変更されていて、滑りにくく指紋が目立たないマット仕上げになっている。



防塵・防水設計

IP55を実現

ノイズキャンセリングや優れた通話性能を実現するために、イヤホン部はマイクを内蔵しているにもかかわらず「IP55」の防塵・防水設計。水洗いもできる。そのほかマルチポイント接続や低遅延モードに対応するなど、全方位に死角なし！



ところで、本機には専用アプリ「Connect」を利用したイコライザー機能が用意されている。プリセットイコライザーはSOLID BASS シリーズらしい音作りで、「Bass Boost - Deep」は余すことなく重低音を感じられるよう、「Bass Boost - Beat」は低音の重要な音をしっかり捉えられるよう、強調する周波数のピークを変えているという凝りようだ。イヤホン左側のトリプルタッチで機能をオン/オフでき、聴く音楽のジャンルに合わせた使い分けもかんたん。ぜひ積極活用してほしい。



インタビュー取材にお答えいただいた、株式会社オーディオテクニカのみなさん。左から田久保陽介さん、松本 将さん、永山優香さん、植堅徹さん。